
氷結鏡界のエデン + チートオリ主

白フクロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷結鏡界のエデン＋チートオリ主

【Nコード】

N8967V

【作者名】

白フクロウ

【あらすじ】

氷結鏡界のエデンのせかいでまさかのチートオリ主のお話。

なかなか見つからないので作ってみました！！

みたいな不真面目作なので、矛盾点、誤字脱字、更新続かず等々問題山積になるかもしれませんが、それでよければ読んでみてください。とても嬉しいです。

カップリングはオリ主×オリキャラ、シュルティス×ユミイ、の予定です。シュルティス達はまだまだですが。

1・転生時のプロローグ(前書き)

9 / 18

大幅変更。

1・転生時のプロローグ

・・・ここは何処だろうか？

俺の名前は亜城水輝

さっき迄、教室でうつらうつらしながら冴えない公立中学で英訳していたはず・・・？

白い床、

白い壁何もない天井

見回しても何も無い、強いて言うならハリポタ秘宝2の空想でのキングズクロスみたい。

取り敢えず歩きまわってみよう。

ん？

十メートルくらい前に、よく見ると霧のような白いモノ。

なんだろうか？

・・・気づいたか？」

っ、っ、っ、！

誰だ？ この場面に話しかけてくるなんて、

しかも、姿が見えない。

「ふ、ふ、心配せずとも構わないよ。怪しい者ではない。」

なんだ？、何も話してないはず。

「ああ、最初に自己紹介から行こうか。私の名は使徒ヨハネ。キリストの弟子だ。ほれ、あんたらの最後の晩餐の神の隣に描かれているじゃろっ？、あ、因みに僕は読心術が使えるのでな。声に出す必要は無い。」

それじゃあ、何で俺はこんなところにいるんだ？。というかここは何処？

「ここはある意味限りなく現実近く、それでいて気も遠くなるほど離れた世界だ。人間の言葉を借りるなら神界てんかくってところかの。そなたがここにいるのは、死んだからじゃ。」

はあ？ 何故に俺は死んでいるんだ？

「それは、ほれ、死神が死因記載書デスノートに書かれたからじゃ。間違えられてじゃが。」

それじゃあれか？ 人生15年で終わってしまったと？

「まあ、ある意味そうも言える。」

ある意味？

「そなたには転生してもらつことになっているからの。希望があったら言ってみるがいい。」

転生？ アニメとか漫画とかラノベとか？

「そんな感じじゃ。そのまま元の世界に戻ることはできんからの。」
ん〜どうしようかな。

「にしてもそなたは元の世界への執着つてもものがないのか？ 大分反對されるのも覚悟したんじゃが」

確かにそういうものは無いね。別に何かしたかった訳じゃないし。出来れば友達とかも連れていきたいけど。そんなに友人関係は広くなかったけど、その分深かったから。でも、無理でしょ？

「それは流石に無理じゃな。第一私は人を殺すことができんのでな。そのかわり願いを6つ叶えてやるから我慢せい。」

そんな事より早く決めてくれないか？」

わかった。じゃあ、”氷結鏡界のエデン”の世界で。あれ好きだったんだよね。

「お？ これはまた珍しいのお。このパターンなら、魔法少女の世界とか、超能力VS魔術の世界とかがレギュラーだと思っただんじやが。」

まあ、それは個人の趣味なのでノーコメント。

そんな事より、要望一、

「今の記憶は残しておくこと。」

二、

「主人公シュルティスや、レオンよりずっと上。主天よりずっと上の身体能力。前世の武器（現実、空想問わず）の創造と心得。」

三、

「皇姫の10000倍くらいのとんでもない沁力。シュルティスの10000倍くらいの無敵の魔笛。」

結界系・降臨系・領域系・礼讃系・洗礼系の術式の心得。第七天音ソフィア・コードと第七真音律エデン・コードの心得」

四、

「容姿は向こう基準でそこそこイケメンで。」

五、

「イリスよりスペックが上の機械水晶が欲しい。」

六、

「前世で特に仲が良くてこんなコトしたそんな園部愛莉と一緒に能力を付けて転生させる」

こんな感じで、

「んふふ、やっぱりその子が気になったおるのじゃろっ？」

ああ、そうだが？ なにか？

（自分で心読めるくせに聞くとかやっぱ腐ってるよなあ。こついつ時は開き直っちゃった方がいい。）

「おい、言つとくが括弧付けても読めるからな。神の使いにそんな口聞くんじゃない。」

だって事実じゃん。つか口聞けどころか心の底で思っただけじゃん。

7

「むむ、そ、そうじゃ。転生について何か質問はあるかの？」
アセアセ」

んじゃーっ目

そっちから介入は有るのか？

「多分無いと思うぞ。新しく転生者が入るのはあるかもしれないが。」

二つ目

その世界にはすでに転生者はいるのか。

「いや、お主が初めてじゃ。」

3つ目

何歳からスタートするのか。

「0歳からじゃよ。容姿は18歳で望み道理になるはずじゃ。」

これで終わりだ。

「ならば、この霧を抜けるといい。浮遊大陸オービエ・クレアまですぐじゃよ。」

よし、っじゃ行きますか。これからどうなるかなあ〜っと。

1・転生時のプロローグ（後書き）

作ってみました。エデンの小説。

知名度が低いのか2次創作が少なかった（見つからなかった）からです。

頑張っていくつもりですが、前例があるので更新悪かもしれません。あと、9月の新刊によっても変わる可能性あり。

9 / 1 8

武器、性別、願い変更により更にチート化

前世の名前紹介

2 パートナー、育て親との出会い（前書き）

9 / 18 大幅変更 オリキャラ2人目

やっと、出来ました。

料理長の口調ってあんまり出てない分難しいですね。
赤ちゃん言葉もムズイです。

2 パートナー、育て親との出会い

ザアアア、、

冷たい雨が降る日の出前。

ある料理店の前には可愛らしい籠の中に入った赤ちゃんが置かれていた。

ふう、どうなったんだ？確か俺と園部はチート能力付きでエデンの世界に転生したはず。

「ふあゝ、はいはい、此処は浮遊大陸オービエ・クレアだよ。原作のシュルティスの誕生と同じ年だ。」

「ば、バブバブ、、、

あ、そうだった。俺現在0歳。

「まあま、無理すんな。あと一年半は片言も喋れねーよ。

そんな事より俺の自己紹介。名前はカイン。一応、男性人格を持つAIユニットであり機械水晶。この世界ではイリスの兄みたいな？

取り敢えずこれから宜しく。因みに処理能力なら妹の5倍、^{イリス}心理念話もそのお陰だぜい。」

ん。宜しく。

園部と念話お願いできる？

「わかった。直通で通すよ」

『おい園部、大丈夫？生きてる？』

カインを介した念話は初めてだけどこんな感じでいいのかな。

【えーっと、亜城君。ここってエデンの世界だよな。】

こんなもんでいいっぽい。カインの時は頭に直接って感じだったけど、この場合は耳元で聞こえるみたいだ。

『そう、ゴメン、勝手に連れてきちゃったし赤ん坊まで戻しちゃって、怒られたらどうしようかと、』

これは、本当。というか、初恋の人に嫌われちゃったらいつまで引きずってるか分かんない。

【ううん、私、ずっと前々からこういうことしたかったし。全然問題ないよ。むしろ好みを覚えてくれたことが嬉しいな】
ふう、良かった。俺は首を起こして赤ちゃんの園部を見ようとしたが、まだ首が座ってないらしい。

『う、うん（赤面）。ありがとう。園部はどんな能力を貰ったの？』

【その前にちょっといい？】

『ん？なに？』

【私、亜城君が私の好みを覚えてくれたり、自分の願いの一つを私のために割いてくれたり、天国で亜城君が私のことを好いてくれる、って知ってとっても嬉しかったんだ。だから、、、その、、私と付き合って、というか許嫁にして、、、、くない？】
うん。とつても嬉しいけど、、、、アイツ人の恋愛事情勝手に話しやがったな！ しかも本人の前で。

『ほ、本当に俺なんかでいいの？ 自分で頼むようなことしてなんなんだけど、俺なんて冴えない一介の元中学生だよ？ それに俺なんて頼りなくてずっと園部に頼っちゃうかもしれない。』

【フフツ、私はそんな頼りなくて冴えないけど私のために願ってくれた亜城君に惚れたのよ。勿論いつでも私を頼ってくれていいし、頼って欲しい。それに、いくら頼りない亜城君でも絶対に傷つくことは無いわ。】

『どづいいうこと？』

【私が願ったことをまだ聞いてないでしょう？ 私は3つしか願えなくて、一つは無制限のテレポート能力、ひとつは沁力と術式なんだけど、もう一つは亜城君、貴方がこれからのことで傷つかないことだから。】

『……………ありがとう。園部は俺にとって勿体無い人間かもしれないけど、俺は園部に全てを捧げると誓う。』

【こちらこそ、亜城君に全てを捧げると誓います。】

（15分後）

【ところで、何で私たち会話出来るの？ 話してないのに。】
そう言えばまだ話してなかったな。でも面倒だし自分でやってもらおう。

『それは、カインのお陰。ちょっと自分で自己紹介してみて。』

「わかったよ。俺の名前はカイン。男性人格の機械水晶でイリスの兄的存在。所持者は一応このめんどくさがり屋で頼りない、本っ当に貴女なんか勿体無い奴。宜しく」
俺に対する嫌味の修飾語多くね？まあ確かに面倒だったけれども。

【フツ、私は園部愛莉、水輝の許嫁、宜しくね。でもいいなあ、機械水晶。私も欲しかった。】
さっき名前で呼び合うことにしたんだけど、やっぱり違和感あるなあ。でも悪くない。
機械水晶は多分無理だと思っよ。うん。

『ねえ、ところでここ何処？
エデンってアニメなかったからよく分かんないんだよね。』

「此処はカフェ・二羽の白鳥の前。神さんが気使ってくれたんじゃないかねえの？」

何処をどう使ってくれたのさ。

「お、熱源センサーに反応あり。料理長てんちょうが来るぜ、って言っても何も出来ないけどね。まあ、あの性格なら育ててくれると思っぜ？」

それに主人公補正と神補正がかかっているでしょ。」

まあ、そうか。

じゃあ、初対面といきますか。

ガチャ、

「ふう、今日もいい朝よね。今日の新作はしんネッどうでしょうか。
ん？ ウチの前にあんなに洒落た籠なんてあったっけ？」

「・・・バブウウ、スースー」

「あらあら、こんなところに置いてあるなんて、やっぱり捨て子かしら。こんなに可愛い子を捨てるなんてそんな人の思考回路が理解出来ないわね・・・。」

よし、いっちょ育ててみますか。母性本能がくすぐられるわねえ」

そんなノリノリな店長さんなのであった。

3・原作介入（前書き）

サブタイの割に原作キャラは出ません。

3・原作介入

そんなこんなで時間を飛ばして10歳。

え？何で飛ばしたかって？

それは、精神年齢15歳の赤ちゃん姿なんて見せたくないに決まってるじゃないか。（作者のめんどくさがりとも言つ。）
あ、でもちっちゃい頃の愛莉もとっても可愛かったぜ。

「何か、手紙が着てるわよ。えーと沁力検査についてが愛莉宛。護士候補生募集が水輝宛で。どうするか考えておきなさい。」

キリエさんが、俺たちの部屋を訪ねてきた。

「はい。分かりました。」

さーでどうしようか。と言っても大体決まってるけど。

ガチャ（戸が閉まる音）

因みに部屋がないせいで俺と愛莉が同じ部屋で寝泊まりしている。そのせいで俺が何回苦労したことが。（男の性的に。）

「で、どうしようか。やっぱり原作介入したいね。」
そのために転生したようなものだし。

「うん。じゃあ、取り敢えず私は巫女見習いになろうかな。私の沁

力量は世界一だし。」

聞くことによると俺の沁力量よりもずっと多いらしい。どう頼んだんだろう？

「でも大丈夫？ 原作だと氷海に沈められながら祈ったりするみただよ。」

「うん。ちょっと怖いけど、でも水輝が千年獅になってくれるんでしょ？ その為なら頑張れるわよ。」

「・・・ありがとう。なら、一年で錬護士まで行ってみせるよ。それまで待ってて。」

「勿論、当たり前じゃない。何年でも待ってるわよ。無理しないでね。」

そんな事を言うてくれる愛莉を俺はとても愛おしく思った。

「ん・・・」

愛莉が瞳を閉じて顎を少し上げた。顔は真っ赤でこれが意味するのは……

(い、いいのか！？お互い好きってわかってたけどさすがに……！)

その時心の中で頭を後ろからこつこつとつつかれた気がした。

(なんだかわからないけどこれは行けってことか！？もういい！責任はとる！……)

そして水輝はそつと愛莉に口付けをした……

「全く、あの二人は相思相愛って10年も前から分かってるのにキス一つしなかったなんて、清すぎるだろ。やっぱり二人には俺が必要だなあ。」

水輝の心の中で決心させたのは、水輝の首の下で二人を見守っているカインだったらしい。

「損な役回りだけど、あの二人なら……まあ上手くやるだろう。」

未だに抱き合っただけでイチャイチャしてる二人を見上げながら、そんなことを思うカインだった。

3・原作介入（後書き）

9 / 19

「だし。」が多かったので変更。

4 ・天結宮入宮（前書き）

いつもより長めです。

4・天結宮入宮

初の接吻キスから一ヶ月。俺は愛莉と一緒に天結宮に来ている。というのも、今日が護士候補生の申し込み日であり、沁力検査日だからだ。

因みに、護士候補生と巫女見習いは共に天結宮ソフィアで生活するが、護士候補生の方が身分が低いため、護士候補生が低階層、巫女見習いが中階層で生活し、会うことは滅多に無いらしい。

あと、亜城水輝、園部愛莉では、どうしても不自然な名前になっ
たしまい申し込みに支障をきたすため、セカンドネームを考えた、
というか作った。

愛莉は、愛莉・レイ・バードウェイにするらしく、理由は「莉」は
「レイ」と読むことと、禁書キャラから取ったらしい。

水輝は、どうしてもミドルネームが思いつかなかったため、水輝・
セイヴェルンと名づけた。

天にまで登るような天結宮ソフィアの前で、水輝と愛莉は向き合っていた。
愛莉がベンチに座るのを確認してから水輝が座る。水輝の肩に凭れ
て愛莉が口を開く。

「…水輝、私、巫女見習いになれる、よね？」

「勿論。巫女見習いって沁力の量で決まるんだろ。愛莉がなれない
わけ無いよ。心配しなくても大丈夫だよ。」

首肯する水輝を見て安心そうに微笑んだ。

「…うん、そうだよ、ありがとう。水輝。」

あと、毎晩水輝の部屋にお邪魔させて貰うわね。これは決定事項で、」

後半のセリフだけやけにはつきりと言う愛莉に水輝が、可愛い、と思ったことは余談である。

「ああ、分かった。歓迎するよ。でも、空間移動で物を消さないでくれよ？」

これを言えば分かることかもしれないが、この空間移動は禁書の設定の流用らしく、飛ばした先に障害物があった場合、重なった部分の物質を押しつけて割り込むように転移するため、飛ばしたものは双方の硬さに関係なく障害物に刺さった状態で出現するようだ。この設定は、座標を間違えると転移物体が自分の場合、物にめり込んで転移してしまうデメリットがあるが、紙一枚でダイヤモンドを加工できるというメリットもある。

因みに脳内演算による能力のため、必然的に愛莉はかなり頭が回り、精神状態が混乱しているときは使えないという側面もある。

「私はそんなへましないわよ。心配だったら念話で座標を送ってくればいいことだし。」

勿論、沁力による念話はふたりとも使える。

「ならベッドの上の座標を送っとくから、そこに転移してくれ。」

「分かったわ。それじゃあ、」

どちらかともなく、まるでそうすることが自然であると最初から理解していたかのように、二人の唇が重なり合う。

それが終わると、お互い晴れ晴れした堂々たる姿で自分の未来の道へ歩いて行くのだった。

角の死角で金髪少女と紫髪少年が、顔を赤らめながら見ていたのは蛇足である。

ソフィア
〈天結宮、屋外訓練場〉

「ですから、巫女の一人として、皆様のご入宮を心から嬉しく思っています。それでは身体に気をつけて頑張ってくださいね。」

壇上にて、堂々と会釈する巫女がいた。

挨拶を終えた彼女が壇上から降りてくるのを、紺のスーツ姿の女性教官が出迎えた。

「素晴らしいご挨拶でしたヴィオラ様」

数年後に同じ壇上で後輩の巫女が噛み噛みで演説するとはだれも予想していないだろう。

「ありがとうございます。ユメルダさん。」

「いえいえ、貴女のように毎回丁寧な演説をして下さる方が巫女に
いるとは、私達も嬉しい限りです。」

「巫女の立場は、あなた達の上に成り立っているのですから、当然
の事です。」

「……ヴィオラさん、是非未来のユミイさんに演説のご指導を
お願いします。」

「それではこれで失礼します。」
礼儀正しく腰を折り、ヴィオラがその場を後にする。

そんな彼女と対照的に。
「さて巫女様の挨拶も終わったことだし、これで今日の入隊式は終
わりだな」

危険な笑みを浮かべて女性教官が振り返った。

「自己紹介が遅れたが、私は諸君らの教育を担当するユメルダだ。
各々、今日は解散。明日から足腰立たなくなるまで鍛えといてやる
から覚悟しておけよ。」

…一言一句違わず言えるのはある意味凄いです。あと微妙に
若いですね。

パシィインツッ!!

「何かお前失礼なことを考えていなかったか？」

「いえいえ、滅相もございません。ユメルダ教官」

…いててえ、貴女は千冬さんですか！
と言いたいけど止めとこう。叩かれる。

ユメルダ教官

女性ながらかなりの長身で、切れ長の瞳。黒髪を肩の位置で切り揃え、口元には白煙を燻らせた煙草。自分たち護士候補生の訓練を担当する、容赦なき教育で知られる鬼教官だ。

「とにかくやつと終わったな、これで帰っていいのかな」

ソフィア
天結宮へと戻っていく候補生に紛れ、水輝は安堵の息をついた。

初めての事が多くて色々緊張したが、無事に終わったからひとまずは安心だ。そのかわり明日から過酷な訓練の本番。戻っていく候補生の顔にもありありと緊張が見て取れる。

『いいから早く帰ろうぜ。このまま残ったらしょっぱなから訓練なんだろ？』

「そうだけど、シユルティスとレオンにはいつ会おう？」

『そんなの夜に訓練場に行けばいいんじゃないのか。訓練してるんだろ？モニカに好かれないうちに頑張るんだな。あと、早く座標を送つとけよ。あんたの上半身が消えてもいいなら別だけど。』

「ハイハイ、分かったよ。」

その後、部屋に行き、愛莉に座標を送ったのだった。

5 ・水輝の武器（前書き）

前回の1・5倍の文字数。

安定しませんね。コメントナサイ。

5・水輝の武器

『愛莉、今大丈夫？』

入隊式も終わった午後4時過ぎ。

暫く離れていた恋人に都合を聞く。

一応、向こうからの提案なのだが、今日は訓練が無かったので大分早く終わったのと、向こうは検査の後に何かがあるか聞いていないので、これぐらいの事は暗黙の了解になっていた。もちろん携帯電話などの無粋な人工機器ではなく、直通の念話ではあるが。

『愛莉？』

すぐ応答してくれると思ったのだが、少し待たなければならぬらしい。念話でさえもできない状態になるのはそんなに頻繁にあることでは無いため、今、瞑想でもしてるのかもしれない。念話を繋げっ放しにしとくのは常人にとってはかなりの負担になるらしいが、水輝達にとっては雀の涙ほどの物だ。

暫くすると向こうが終わったようで、声が聞こえてきた。

『ハイ。こちら愛莉ですよ。何？水輝』

『何って、何でそんなにハイテンションなの？ 瞑想してたんでしょ？』

本当にすっかり祈ってたなら、かなり精神的に堪えるはずである。『勿論、本気で祈ってたわよ。でも、折角水輝が話してくれてるのに疲れてる口調なんて勿体無いじゃない。』

要するにかなり疲れていて、無理しているらしい。

『そんなに無理しなくていいよ。いつ頃に戻れそう？座標は送っておいたけど』

『分かったわ。シャワーも入りたいし多分一、二時間掛かるわね。』

あ、一緒に入ってくれない？』

そんな事をしれっと言い出す愛莉。言うなでもなく水輝の顔が真

っ赤になっている。

『申し出は有難いんだけど、今日はちょっと遠慮させて頂きます。というかこっちのことも考えて下さい。理性が飛びます。』

『フフツ、襲われても怒らないわよ?』

『じゃあ、出来るようになったら初めてを貰って欲しい。』

『それって、女が言うもんじゃないの?』

…まあ、こちらこそ、優しくしてね。』

『あ、ああ、分かった。』

『取り敢えず、訓練?頑張ってるね。』

頭に血が登っている水輝にはコレしか言えなかったのである。

〈午後6時前〉

特にやることも無いので、大人しく待っていると、”シュン”と音がして、気付いたときには既に愛莉がベッドの上で座っていた。瞬間、俺を視認した愛莉は、さっきと同じ空気を押し出す音と共に俺の膝の上にあった。

「あの、愛莉さん?」

どうやら、愛莉は疲れて水輝の膝を枕にして眠ってしまったようである。

〈深夜0時〉

淡く白く光る月光の中、少女がベッドの上で気持ちよさそうに寝ていた。その横には木でできた椅子の上に座る少年が、少女の髪の上に自身の手を置きながら、彼女の上に俯せになったしまっていた。どうやら、愛莉が眠ってしまった後、水輝が自分のベッドの上に彼女を寝かせ、髪を撫でながら起きるのを待っていたらしい。が、自分も寝てしまったと。

さながら、風邪を引いた妹を夜通しで看病しているような兄、の構図である。

「ん、んんあ、此処は？」

ベッドに寝ていた愛莉は、何故こんなところにいるのか不思議に思ったのか、水輝を起こしにかかると。

「ンツンん、あ、起きた？」

「うん、よく寝れたよ。ベッドに運んでくれたんでしょ？有難う水輝。」

「うづん、そんなの何でもない事だよ。」

…ねえ、夜の散歩に行ってみない？ 訓練中のシウルティスやレオンに会えるだろうし」

寝起きの愛莉は水輝に比べて意識がはっきりしないのか、うつらうつらしながら「うん、わかった。」と答えた。

雲一つ無い黒の天球

その天上を突き刺すように、淡い白光の天結宮ソフィアがどこまでも空高く伸びている。

昼間のうちに光を溜めた塔の素材が、夜になってその光を放出する。その景観はさながら塔そのものが一つの照明のようである。

『ホントに懐中電灯要らずなんだな。多少暗いが、歩くぶんには不自由しない位の光量はあるみたいだぜ。』

「流石に野外訓練場までは、照明としては全く使い物にならないみ

ただいだけどね。」

おぼろげに光り輝く天結宮ソフィアの下で、足元に伸びる自分の影を眺めながら水輝と愛莉は夜の舗装路を歩いていた。

「うーん、夜の散歩ってロマンティック。道を歩くのが男女のカップルってのもポイントアップなんじゃない？」

「散歩って言っても野外訓練場まで行くだけだよ。」

「女の子ってのは星を見ながら彼と歩くのが理想って物なのよ。」

「ハイハイ。カイン、こっちで合ってるの？」

『ああ、あんたらが寝てる時から天結宮ソフィアの情報集積機メインコンピュータでデータ収集してたからな。取り敢えず、地図情報と戸籍データだけはコピーしといたぞ。』

「悪い、有難う。カイン。」

昼の暑さを残す熱風が音もなく過ぎていく。

勢い良くはためく黒の上着を抑え、暗い芝生を先へ先へと進んでいった。

『あ、その道を左に行くと近道だ。』

「了解。」

電子マップには載っていない藪だらけの道をまっすぐに突っ切つて

さつと視界が広がった。

「へえ、此処ってこんな広い物なんだ。学校のグラウンドぐらいだと思ってたけど。」

初めて此処に来る愛莉は驚きっぱなしだ。巫女見習いは実践が少なめな上、候補生ではなく正護士と同じ階級のため、候補生用のここに来ることは殆ど無い。

野外訓練場。

芝生が覆うのは敷地全体の半分ほど。残りは砂の丘陵、岩石地帯、荒野。浮遊大陸の様々な環境を備えた特殊仕様になっている。雨を防ぐ屋根こそ無いが、雨の日は雨天時を想定した訓練になるという訳だ。

そんな敷地が、夜光灯の光の届かぬ暗闇の向こうまで続いている。『野外訓練場を使用するのは護士候補生だけで、まだそんなに増えていないとしても八百人あまりだからな。そんだけの人数が剣を振ったり銃を構えたりするもんだから、これくらい必要なんだろ』

『後、正護士の定員は三百に届かないからな。そこまでの道で競争に遅れないようにすることもわすれるな。』

「わかってるって。そのために一応夜に武器に触っておかないと。」
『その点、巫女見習いは巫女見習いになってしまえば後はその中で上がっていくだけだ。そのかわり巫女見習いの定数は二十人ジャストの筈だ。かなりの倍率だったんだな。』

一般的に見込み習いは、巫女になるためになるものであるためそこまでの人数を必要とせず、護士候補生に比べ、かなりなることが難しい。巫女を守るための人は数と質が大事、の護士とは逆の理屈だ。

「まあ、ね。でも、最初は誰も術式なんてできないから、単なる沁力量のトップ20が選ばれたらしいわね。一位は私で二位がユミイだったわよ。」

「・・・原作ではユミイさんトップ合格だったんですね。It's原作ブレイク。」

「それで、水輝は結局どんな武器使うの？なんでもOKなんですよ。」

「うーん。考えたんだけど、、銃槍なんてどう？」
ガンス
銃槍
ランス

槍の派生型で火薬による砲撃が可能。竜撃砲は高火力の必殺技だが、暫くは放熱のために砲撃は出来なくなる。

要するにランスじゃ火力不足だけど大剣だと隙が多すぎる、ならランスを改造すればいいんじゃないかな？的な武器。

「それってモンハンでしょ？と言うか、竜撃砲とかフルバーストとか生身相手じゃ木っ端微塵じゃない？」

「その辺は自制するって。出来そう？カイン。」

『可能だが、どれにするんだ？』

「じゃあ、猛風邪銃槍で。」

扱えれば最強クラスの銃槍。クワガタみたいな剣が二本先にくっついてる奴。

「わかった。カイン銃身構築。」

『対人間用に設定し、炭素原子を核に固定。ダイヤモンド・ナノロッド凝集体による銃身及び刀身を構築。更に氷結鏡界の蒼氷を転移、コーティング。破壊限界を2の64乗に設定。』

何も無いはずの空中から光り輝く粒子が生まれ、徐々に銃槍を形作っていく。そこには、刀身だけでもダイヤの3倍分硬い、碧色の煌びやかな銃槍があった。

5・水輝の武器（後書き）

どうだったでしょうか。

ダイヤモンド・ナノロッド凝集体とは、俗に言うハイパーダイヤモンドのことです、ホントに3倍硬いらしいです。

6・V Sレオン

【Sia Sec elis arc……Is io miel】

(あの日の夢を、もう一度……そうありますように)

滑らかな、一切の淀みなく少年の唇が紡ぐ^紡言霊^{言霊}。

…これは。

沁力の開放序詞。

沁力。魔笛と真逆の波長を有するとされる、奇跡を顕現させる神祕の力である。しかしその会得は容易ではなく、それこそ天結宮^{ソフィア}などの特殊機関で長期間の訓練を要するとされる。

…水輝と愛莉だけは例外ではあるが。

「祈り、儂く。願うもの、遠く。実、理を超え。思念、一切を忘れ。……」

沁力の波動と彼女の詠唱が重なり、奇蹟が世界に沁みて顕現していく。

「儀礼鉄鋼より第三の石……降臨^{おりのぞ}め、白銀の結晶たちよ」

それを証明するかのごとく、雪のように淡い白光の粒子が少年の全身を灯し その光が腕を通じて碧の銃槍にも伝わっていく。

「我の……降臨より導き、二の三十六乗の過程をもって世界を結成す」

瞬間。淡く透^{うす}いものでしかなかった白光が銃槍に収束し、結晶化した。

沁力の光が銃槍の先端に煌めく結晶として生まれ変わり、あたたかもそれは白銀の刃を剣のように。

「ふう、終わった。コレって結構力使うもんなんだね。結構疲れちゃったよ。」

先ほど術式を発動した水輝が言葉とは裏腹に嬉しそうな声で言う。「水輝、疲れたとか何とか言っちゃって元気そうじゃない。あと勝

手に巫女用の降臨術式改造してたでしょ。」

本物の、と言ってもサラ用に編曲されてはいる、降臨術式は、「
我の」ではなく「巫女の」、「三十六乗」ではなく「二十二乗」の
筈である。

「だって巫女じゃないのに巫女のとかな嫌じゃん。22乗じゃ足りな
かったし。」

そんな事を言う彼の足元には、ハイパーダイヤモンドの刀身に蒼
銀の氷結鏡界のコーティング、更に降臨術式による白銀のコーテ
ィングがなされた、輝かしい銃槍があった。

「まあ、今度からは巫女の術式は使わないよ。と言うか多分降臨術
式の出番は滅多にこないよ。」

「それはそうでしょうけど、、、」
なりたてでも巫女見習いである愛莉は、術式を変えることには抵
抗があるようだ。

カツ、バストツ、ギ、

ずっと向こうまで建物の無い空間に出ると、剣を交じわす音が聞こ
てくる。

『シウルティスとレオンだな。あの二人』

「そうみたいね。」

二人＋一機の目線の先には、銀髪で大柄な青年にも見える少年と
紫の髪で身軽に動くどちらかと言えば小柄な少年が、剣を振り、時
に避け、時に守りながら戦っていた。二人ともかなり真剣にやって
いるようで、こちらのことには気づいていないようだ。

「ちょっと、見学がてら移動しようか。」

「いえ、その必要はないみたいよ。シウルティスの方の握力がだい
ぶ下がってるわ。すぐに決着がつくわね。」

そう愛莉が言った直後、レオンにもそれが分かったのか、大剣を
下段構えにしてシウルティスに突っ込んでいく。当たる瞬間、シ
ウルティスは上に跳躍。その一撃は回避したが、レオンは下段に構え

なおして落下地点へ。そして下段から上に大きく回すようにして大剣を振る。それを真正面から受けた二本の双剣は衝撃に耐え切れずにシュルティスの手を離れる。一本はすぐ下の地面へ。もう一本は見学していた水輝達の方へ飛んでいく。

水輝達の方へ、、、？

刹那、水輝は手に持っていた銃槍で飛んでくる剣を叩き落す。

白銀の薙。

その後、そこを見るとなにか落ちていることはなく、双剣は両方ともシュルティスのすぐ横にあった。

〽数分後〽

「わ、悪い！大丈夫か？」

長い沈黙からいち早く復活したのはレオンだったようであり、すぐさま謝りに来た。

「こんな所にこんな時間にいる人間は俺らだけだと思ってたんだが、本当に済まない。」

……意外と責任はちゃんと取るタイプなんですな、レオンさん。

「いや、そんなに謝らなくてもいいって。確かに何も言わずに此処にいたのは俺達なんだし。」

「そうそう。第一別に怪我とか負ってないから、大丈夫よ。」

「そう言っただけだと助かる。俺はレオンだ。レオン・ネストリウス・オーヴァでこっちが」

「えっと、僕はシュルティス、シエルティス・マグナ・イールです。宜しく。」

二人の自己紹介が案外あっさりしたもので助かった。これなら結構楽だ。

「こちらこそ、水輝・セイヴェルンです。水輝って呼んでくれ。」
「私は愛莉・レイ・バードウェイです。愛莉って呼んでもらって構わないわ。宜しく。」

「二人は此処で何してたの？訓練？」

答えは決まっているが一応聞いておこう。

「ああ、初日は何もしなかったからな。体が訛らないように、ってとこだ。そっちは？」

「うーん、そんなに変わんないかな。こっちに来てまだ触ってなかったからね。」

「愛莉は？同じ？」

「……そう言えばまだ話してなかったな。」

「ううん。まず、私、候補生じゃなくて巫女見習いなのよ。でも暇になったから水輝の部屋に遊びに行つて、付いて来たってわけ。」

「えっ、でも、身分が上つて言つても男子階層に来たら騒ぎになるんじゃない？監視とかもあるだろうし、どうやって来たの？」

よくご存知ですね。まあ、此処で話してもそんなに変わらないだろうし、この二人なら簡単に漏らしたりしなそうだな。

「ああ、それは私がちよつと特別なのよ。まあ、ちゃんと話すわよ。いつか。」

「いつか？ まあ、それはいいか。それより此処に来てるってことは武术も幾つか出来るんだろ？相手してくれないか？」

「ああ構わないよ。それじゃあ始めよう。愛莉、一応審判とカウントをお願いできる？」

双方の距離を離し、戦闘準備をする二人。

ちよつと困つたような顔をする愛莉。

「ハイハイ。仕方ないわね。なら擬似結界だけ。」

【phia・Sola telah sitra】

愛莉の沁力発動、その開放序詞。

それを口ずさんだ直後、地に立つ巫女一（見習い）を取り巻くように蒼い光が展開した。

「二重の一謡 結界系にて福唱・姫式 略儀・塔法七条にて 巫女見習いの第一位、沁力使用を申請」

沁力のイメージは『波』。

一滴のしずくが湖面に触れ、そこから波紋が広がっていくように、沁力も術者を中心に広がっていく性質を持つ。ゆえに愛莉が唱うように、詠唱を情報の波として世界に沁み渡らせることで、沁力の拡張速度は飛躍的に加速する。

「中間儀礼は……面倒なのでカット。

しからは結界より導き、二の二十二乗の過程をもってこれを循環くりかえす はい、発動とっぞ」

雪の結晶よりも小さい光の粒。

花吹雪が覆うように、淡い輝きがレオンと水輝の中心に渦巻いてふわつと風を巻き起こし、愛莉の擬似結界が半径十数メートルまで拡張。

その合図と同時、一人の少年が駆けだした。

大剣を構えて口元に笑みを浮かべたままレオンが突っ込む。

まっすぐ、何の小細工も無い直線運動。十代の少年としては速い方だが、水輝という各武器を極限まで極めてある銃槍の使い手を相手にするにはあまりにも緩慢な動きで。

対して、水輝はまだ微動だにしない。

彼我十メートル…八メートル、七、六…五メートル。

相手を見据えたレオンが自らの身長ほどある大剣を横に薙いだ後には、水輝はほぼレオンの後ろにいた。レオンが危険を察知し剣を盾がわりに自身の前に置いたと同時に、銃槍の芯で大剣の真ん中を叩く。間髪を入れずに銃機構で砲撃。連続する攻撃にレオンの表情が一変。バックステップを使い距離を取る。

隙を見て水輝がリロード。水輝の足が動くと同時に白く輝く刃の閃光がまず見えて、愛莉達見学人が風鳴りを聞き、、、ガガン！！

そこには、盾で受け流され地面に突き刺さった大剣と、首筋に刃を当てられたレオンがいた、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8967v/>

氷結鏡界のエデン+チートオリ主

2011年10月1日23時27分発行